



# The Baseball Hall of Fame and Museum

## 公益財団法人 野球殿堂博物館

### 平成27年 野球殿堂入り表彰式

館長 廣瀬 信一

今年で、節目の100年目を迎えた全国中等学校優勝野球大会（現・全国高等学校野球選手権大会）を創設され、朝日新聞社創業者で元社長の故・村山 龍平さんの野球殿堂入り表彰式を、高校野球の聖地である甲子園球場で8月6日(木)第97回全国高等学校野球選手権大会の開会式直後に行いました。

当日は、村山さんのお孫さんで朝日新聞社社主の村山 美知子さんがご高齢のため、代理として朝日新聞社社長の飯田 真也さんにご出席いただきました。

開会式は、第1回大会出場10校の復刻ユニホームを着た選手の行進もあり、大変な盛り上がりでした。グラウンド整備が終わり、第1試合開始前に大観衆が見守る中、赤い絨毯が敷かれたバックネット前で表彰式は行われました。



朝日新聞社・飯田 真也会長のあいさつ

始めに、場内アナウンスとスクリーン映像により、村山さんの功績が紹介されました。続いて、飯田さんに（公財）野球殿堂博物館・熊崎 勝彦理事長より記念のレプリカを、そして（公財）日本高等学校野球連盟・奥島 孝康会長より花束が贈られました。

次に、飯田さんより、高校野球100年の記念すべき年に、教育の一環として大会を創設した、村山さんの功績が認められ、野球殿堂入りを果たすことができたことに対し感謝を述べられ、本大会が夏の風物詩として親しまれ、今日の盛況があるのは、高校野球に関わるすべての皆様のご尽力の賜物であるご挨拶がありました。

最後に記念撮影が行われ、大観衆に見守られた表彰式は無事に終わりました。



左より 野球殿堂博物館・熊崎 勝彦理事長、朝日新聞社・飯田 真也会長、日本高等学校野球連盟・奥島 孝康会長

## 2015年 夏休みイベント「野球で自由研究！」報告

今年も夏休みの7月17日(金)～8月31日(月)まで、館内の図書室、イベントホール、野球殿堂ホールで野球をテーマに自由研究を行う小・中学生をサポートする「野球で自由研究！」を開催しました。

期間中は多くの子ども達が来館し、自由研究のテーマを決め、本や雑誌から資料を探したり、館内の展示を見たりしながら、自由研究をしていました。

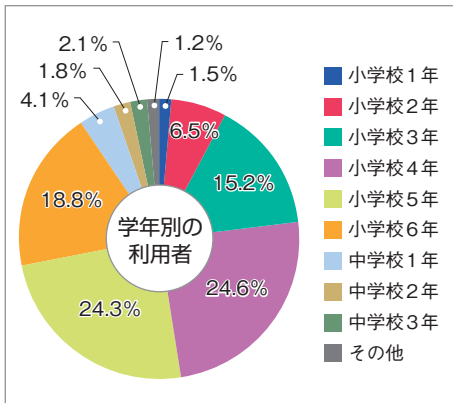
図書室で、スタッフと一緒に実際に“研究”した小・中学生は341人でした。

学年別では、小学校1年生、2年生、3年生がそれぞれ5人、22人、52人で、3学年の合計は79人となり、全体の約23.2%を占め、低学年にも調べ学習が広がっていることがわかります。

テーマ別では、野球用具を選んだ子どもたちは167人(全体の約49%)で、そのうちボールが57人、バットが56人、グラブが34人、用具全体が18人でした。その他には、野球の歴史が72人、変化球が21人、高校野球が18人、野球場が8人でした。



自由研究テーマ別内訳



	歴史	野球場	用具					変化球	記録	高校野球	その他
			用具	バット	グラブ	ユニホーム	ボール				
小1	0	0	0	1	1	0	3	0	0	0	0
小2	5	2	2	5	1	1	2	2	1	0	3
小3	8	2	4	10	8	0	8	0	1	2	8
小4	18	2	4	18	12	1	14	5	0	4	10
小5	17	2	5	9	6	0	17	5	1	8	10
小6	17	0	3	12	5	0	10	5	0	4	8
中1	4	0	0	0	1	0	2	3	0	0	3
中2	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	4
中3	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	4
その他	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計	72	8	18	56	34	2	57	21	3	18	51

### 「ミニミニ実験コーナー」

7月31日～8月31日の当館でイベントのある日を除く毎日(合計27日間実施)

殿堂ホールにて、午後2時と3時の1日2回、それぞれ約30分行いました。子どもたちはホークスの柳田 悠岐選手、ライオンズの森 友哉選手のバットを実際に持ったり、侍ジャパンの菊池 涼介選手のユニホームを着たりと、貴重な体験をしました。



#### 14時の回

##### ①変化球のひみつ

風船や紙筒を使って、カーブの基本的な原理(ベルヌーイの定理)を説明。

##### ②グラブのひみつ

明治時代(レプリカ)、昭和初期(レプリカ)のグラブと現在のグラブを比較。

##### ③ユニホームのひみつ

侍ジャパンの菊池 涼介選手のユニホームを説明し、小・中学生限定で白手袋を着用して実際袖を通し、軽さを体験。

#### 15時の回

##### ①硬式ボールのひみつ

ボールのルール説明。ボールの製造工程見本を使い、硬式ボールのできるまでを説明。

##### ②バットのひみつ

バットのルール説明。ホークスの柳田 悠岐選手、ライオンズの森 友哉選手のバットの長さを測り、重さを量る。小・中学生限定で白手袋を着用して実際に持ち、長さや重さを体験。





「野球の記録をつけてみよう！」

7月30日(木) 13:00~14:30



講師は元NPBセ・リーグ記録部長 石井 重夫 氏でした。

参加者40人の内、20名が小学生で、全員が野球の記録をつけるのが初体験でした。



子ども達は石井氏から「早稲田式」の記録の付け方の説明を聞いた後、実際の試合の映像を見ながら、1球ごとに頭を上げ下げし、記録を付けていました。“本物”のプロ野球の元記録員から直接書き方を教えてもらい、一緒に記録をつける事は、普段できない体験になったと思います。

「親子クラブ製作教室」

協力：ミズノ株式会社

8月17日(月) 13:30~16:00



当館ホームページ等を通じて参加者を募集し、約80通の応募の中から抽選で選ばれた14組28名の親子が参加しました。

当日はミズノ社スタッフ4氏のご指導のもと、約2時間かけてひも通しの作業を行いました。例年以上に子ども達が積極的に作業に係っていたのが印象的でした。

自由研究向けにメモをとったり写真撮影をしながら作業をする親子が多く、各組とも子ども達が中心となって、世界でただひとつの自作クラブを完成させました。最後にクラブを手に集合写真を撮影し、子ども達は皆、大事そうにクラブを持ち帰りました。



「夏休み審判学校！」

協力：NPB

8月3日(月)、10日(月) 両日とも 13:00~15:00



講師陣は、現在野球規則委員で前審判長の井野 修 氏、審判長 友寄 正人 氏、審判技術委員 山崎夏生 氏と平林 岳 氏の4名でした。

子ども達は、4名の講師の方のお話を聞きながらメモを取り、写真を撮るなど、真剣に“授業”を受けていました。“授業”では、“本物”のプロ野球審判員から直接話を聞いたり、迫力あるコールの声に驚いたり、審判員の用具に触れたり、アウト、セーフのジャッジを実際に体験しました。子ども達にとって“本物”を体験するまたとない機会になりました。



「バット製作実演」

協力：ミズノ株式会社

8月18日(火)、19日(水)  
両日とも11:00~12:00、13:30~14:30、15:00~16:00



当イベントは、2004年の開始以来12度目を迎えました。本年も渡邊孝博クラフトマンにご来館いただき、両日とも1日3回、各1時間の実演を行っていただきました。各回とも開始前から席が埋まる状況で、特に最前列は子ども達の優先席としたこともあり、メモやカメラを手にした子ども達たちが熱心に見学していました。

渡邊クラフトマンには、原料の木材やバット製作の工程についてのお話、バット製作の実演、紙やすりかけ体験(小学生3~4名限定)を実施していただきました。その後の質疑応答コーナーでは、自由研究目的の子ども達や野球ファンの方から沢山の質問があがり、1つ1つ丁寧に回答いただきました。



もの  
知ってほしいこんな資料 (85)

三宅 大輔氏 旧蔵 1935年東京巨人渡米遠征集合写真

当館では本年6月、三宅 大輔氏 (1969年野球殿堂入り) 旧蔵品である1920年三宅氏パスポートや、写真77枚等を、米国在住のご遺族の友人を通じてご寄贈いただきました。



集合写真

写真には、三宅氏の慶大時代の写真や、1922年の日米野球で来日した大リーグ選抜のケーシー・ステンゲル選手 (後のヤンキース監督、1966年米国野球殿堂入り) らの写真、戦後のプロ野球等の写真に加え、1935年東京巨人の第1回渡米遠征の写真5枚も含まれています。

今回ご紹介するのはそのうちの1枚で、巨人の第1回渡米遠征中、3月19日にカリフォルニア州の州都サクラメント市にある州議事堂をバックに撮影された写真です。三宅監督、市岡 忠男総監督に加え、二出川 延明主将以下計18選手が地元の日本人会の方々と共に写っています。

この遠征は3月2日の初戦から7月初旬までの128日間に109試合を戦い、米国に加え、メキシコ、カナダでも試合を行い総移動距離は2万キロ超という大変ハードな遠征でした。その遠征の序盤、パシフィック・コースト・リーグ所属のサクラメント・セネターズとの試合 (3月16、17、20日) の合間に撮影された写真です。写真の下には「Dai Nippon Tokyo Base Ball Club Team at Capital Park. Mar. 19. 1935 oyama photo」と記されています。監督・選手の胸には、ネームプレートが付けられています。当博物館では沢村 栄治投手のネームプレートを収蔵していますが、この写真の沢村さんの胸からもネームプレートの飾りのボールがのぞいています。

当時の読売新聞に、この写真と同一と思われるものが掲載されていますが、これまで当館では収蔵しておらず、大変貴重な写真資料だといえます。

当博物館では、殿堂入り選手、関係者の写真を収集しています。古い写真をお持ちの関係者の皆様からのご連絡をお待ちしております。

学芸員 関口 貴広



沢村 栄治選手



ネームプレート



こんにちは図書室です



戦中に発行された『体育週報』

今回は昨年ご寄贈いただいた資料の中から、戦中に発行されていた『体育週報』をご紹介します。この『体育週報』は戦前に大阪で発行されていたタブロイド版の『ベースボールニュース』を、改題したものとされています。当館所蔵の中で、最も古いものは、以前ご紹介した戦後1945年12月1日発行の臨時号でしたが、今回寄贈されたものは戦中の1944年1月1日に発行された第533号から、1945年1月1日発行の第549号までの計15部で1冊に製本されており、戦中にも『体育週報』が出版されていた事を示すものです。

中を開いて、野球の文字が最初に出てくるのは3月21日発行の第537号で、表紙には“精進一年に新発足する 春の日本野球陣容”となっており、景浦将選手 (1965年殿堂入り) の写真が大きく掲載されています。また、1945年1月1日に発行された第549号はほとんど相撲の記事ですが、1ページだけ野球の記事があり、“日本野球報国会声明 公式試合は一時中止”と見出しが出ています。これは前年11月13日に発表された公式戦中止の声明だと思われます。これまで声明の詳しい内容は分かりませんでしたが、この記事には具体的に示されており、非常に貴重な資料といえます。



司書 茅根 拓





2015年 野球殿堂入り  
村山 龍平氏

## 殿堂入りの人々を語る(49)

祖父 村山 <sup>りょうへい</sup>龍平の思い出

村山 美知子 (2015年野球殿堂入り 村山 龍平氏の孫)

朝日新聞社社主の村山 美知子さんは、今年8月6日の甲子園大会開会式の後、甲子園球場のグラウンドで催された殿堂入り表彰式への出席を楽しみにされていましたが、ご高齢のため、断念されました(飯田 真也・朝日新聞社会長が代理出席)。その際、村山社主からお聞きしたメッセージを以下に再録させていただきます。(朝日新聞大阪秘書役 樋田 毅)

「敬愛する祖父の村山 龍平が野球殿堂に入ることを心から喜んでおります。私は祖父のことを、『おじいさま』と呼んでおります。大正4(1915)年の第一回全国中等学校優勝野球大会(現在の全国高等学校野球選手権大会)で、おじいさまがパナマ帽に羽織、袴、足袋、草履の和服姿で最初の始球式にのぞんだことは、私も写真でよく知っています。朝日新聞社の社長として、大会創設を決め、大阪の豊中球場で第一回大会を開催してから100年が経過したのです。私は8月16日、満95歳になりますが、私が生まれる5年前に大会が始まったと思うと感無量です。

私が幼少のころ、おじいさまと野球についてお話をした記憶はございませんが、小学校の運動会で私が走る徒競走の応援に来てくださったり、美術品を集めた家の蔵へ一緒に入り、色々話していただいたり、と楽しい思い出がいっぱいです。きっと、野球などのスポーツが子供たちに好ましい影響を与えることをよく理解していたのだと思います。

私もかつては甲子園球場のバックネット裏の席に座り、ボールが飛んできて金網にドーンとあたるのを気にしながら、観戦しました。父の村山 長挙が社長だったときには、開会の挨拶なども球場で聞きました。今も、毎年欠かさず、開会式はテレビをつけ、選手の皆さんの行進、社長の挨拶の内容や話しぶりなどを、楽しく拝見しています。甲子園大会は私にとりまして、きわめて身近な存在です。本当にありがとうございました。」

ここからは、村山社主担当の秘書役として、少し付け加えさせていただきます。村山 龍平は朝日新聞社の創業者であり、明治・大正期に同社を全国屈指の新聞社に育てあげた並外れた事業家でした。没後20年の昭和28(1953)年に刊行された『村山龍平傳』には、甲子園大会についての記述が28ページに及んでいます。書き出しは「大正初期以来朝日の文化的諸施設の中で多大の称賛を博したものに各種スポーツの指導と奨励がある。しかしてその第一着手であって、しかも最も成功したものに全国中等学校優勝野球大会がある」となっています。『龍平傳』によると、大正4(1915)年の7月初旬、箕有電鉄(阪急電鉄の前身)の幹部が朝日新聞社を訪ねてきたのが、大会創設のきっかけでした。沿線開発の一環で大阪・豊中につくったグラウンドの利用策として、「学生を主体とする年中行事的の野球大会」を提案。当時の朝日新聞社の長谷川 如是閑社会部長らが双手をあげて賛成し、経営陣に相談したところ、「(社会部長の)長谷川の話をも黙って聞いていた村山社長は説明が終わると即座に『よく判った。善は急げというから、すぐ準備にかかるがよかろう』と一言。(中略)グラウンドの設備一切を電鉄側で、あとは万事朝日が引き受けるという至極簡単な取り決めで、この空前の大計画は一日で決まり、(中略)『全国中等学校優勝野球大会』という名称もその日のうちに決まった」とあります。1カ月余り後の8月中旬には、地方予選を経て全国大会が開催されたのですから、驚きです。村山 龍平が84歳で他界したのは昭和8(1933)年11月24日。美知子社主は12歳でした。社主が「おじいさまの思い出話」をされる時は、いつも至福に満ちた表情をされます。

## 野球殿堂博物館 トピックス (2015年7月中旬～9月)

### 7/18(土) ボーイズリーグ リプケン大会出場選手来館!

「2015カル・リプケン12歳以下世界少年野球大会」に出場するボーイズリーグの選手と関係者が来館されました。

### 7/21(火) 福嶋 一雄氏 (2013HOF) が来館!

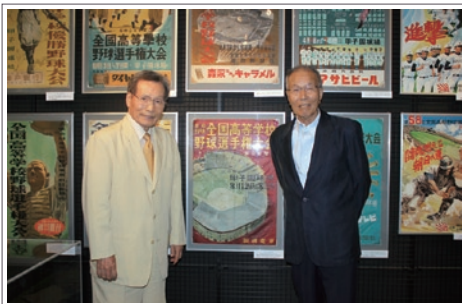


2013年野球殿堂入りの福嶋 一雄氏が来館し、特別展「高校野球と野球殿堂」や企画展「都市対抗野球展」をご見学されました。



### 7/22(水) 中西 太氏 (1999HOF)、植村 義信氏来館!

中西 太氏 (1999年殿堂入り)、植村 義信氏 (元大毎) が雑誌の取材で来館されました。



### 7/28(火) 「アジア野球連盟パーソン杯」寄贈!

日本野球連盟より、都市対抗野球大会の優勝チームに贈られた「アジア野球連盟パーソン杯」が寄贈されました。同杯はアマチュア野球コーナーで展示中です。



左から、野端 啓夫 日本野球連盟専務理事、廣瀬館長

### 8/2(日) ドアラ来館!

中日のマスコット、ドアラが来館しました。



### 8/3(月) 金本 知憲氏来館!

金本 知憲氏 (元阪神) がテレビ番組の収録のため、来館されました。



### 8/7(金) 広島カープ特別ユニホーム展示!

原爆投下から70年目を迎えた8月6日(木)、広島は「ピースナイター」を開催し、選手・監督・コーチ全員が背番号「86」のユニホームを着用しました。当博物館では広島より同ユニホームをご寄贈いただき、翌7日の夕方より展示を開始しました。



### 8/15(土) 松井 稼頭央選手 通算2000安打バット等展示!



楽天と松井 稼頭央選手より、同選手が2015年7月28日のソフトバンク戦(秋田)で、日本通算2000安打を達成した際の着用ユニホームと使用バットをご寄贈いただきました。

### 8/7(金) 野村 謙二郎氏来館!

野村 謙二郎氏 (前広島監督) が雑誌の取材で来館されました。



### 8/18(火) 振興会八木澤理事長来館!

全国野球振興会(日本プロ野球OBクラブ)の八木澤 荘六理事長が来館しました。特別展「高校野球と野球殿堂」に作新学院での春夏連覇の際のメダルをご出品いただいております。同展等をご見学されました。





**8/20(木) ランディ・ジョンソン氏ら来館！**

大リーグのアリゾナ・ダイヤモンドバックスのCEO補佐のランディ・ジョンソン氏（2015年米国野球殿堂入り）、同職のルイス・ゴンザレス氏らが来館されました。



**8/29(土) 谷繁 元信 監督兼選手  
3018試合出場時用具寄贈式開催！**

谷繁監督兼選手（中日）にご来館いただき、プロ野球新記録3018試合出場時着用ユニホームとキャッチャーミットをご寄贈いただきました。



**9/2(水) ロッテデー開催！**

12球団デーの「千葉ロッテマリーンズデー」を開催。歴代ユニホームや2015年のスケジュールポスター等を展示しました。

**9/7(月) 長嶋 茂雄氏 (1988HOF) が来館しました！**

長嶋 茂雄読売巨人軍終身名誉監督（1988年野球殿堂入り）が、テレビ番組の撮影のため来館されました。



**9/21(月) 東尾 修氏 (2010HOF) が来館しました！**

東尾 修氏（2010年野球殿堂入り）とお孫さんの理汰郎君が、テレビ番組の撮影のため来館されました。



**野球守**

当博物館では本年3月より好評販売中の「野球守」を、侍ジャパンの全世代の選手たちに贈呈しています。

**7/21(火)  
U-12日本代表チーム**



廣瀬館長より  
仁志 敏久監督と伊藤 圭輝主将に贈呈

**8/26(水)  
U-18日本代表チーム**



廣瀬館長より  
西谷 浩一監督と篠原 涼主将に贈呈

**9/12(土)  
社会人日本代表チーム**



廣瀬館長より  
安藤 強監督と渡邊 貴美男主将に贈呈

**10/4(日)  
U-15日本代表チーム**



廣瀬館長より  
伊藤 将啓監督と橋原 壘主将に贈呈

**博物館からのお知らせ**

**▶退職**

9月30日付でお客様相談室の堺 富士子と学芸員の稲垣 真理子が退職いたしました。

**▶販売中**

●「古田 敦也氏 直筆サイン入りフォトスタンド」  
価格 21,600円（税込）

【限定100台・シリアルナンバー入り】  
2015年野球殿堂入り記念として、古田 敦也氏直筆サイン入りの写真をフォトスタンドに入れて好評発売中！

（写真のサイズ—2L）  
（シリアルナンバー入り）

郵送ご希望の方は、商品価格+500円（送料）を野球殿堂博物館まで、現金書留にてお送り下さい。



**●編集後記**

紙面の都合により「コラム 博覧/博楽」は休載します。

博物館のご案内	場 所	東京ドーム21ゲート右	
	開館時間	3月1日～9月30日 AM10時～PM6時 10月1日～2月末日 AM10時～PM5時 (入館は閉館の30分前まで)	
	入館料	大人	600円 (500円)
		高・大学生	400円
		小・中学生	200円 (150円)
休館日	65歳以上 400円 月曜日(祝日、東京ドームでの野球開催日、春・夏休み中は開館) 年末・年始(12月29日～1月1日)		

**《11月・12月・1月の休館日》**

11月 2日・9日・16日・30日  
12月 7日・14日・21日・28日～31日  
1月 1日・18日・25日

**野球殿堂博物館 Newsletter 第25巻 第3号**

2015年10月27日発行(年4回発行)  
編集・発行 公益財団法人 野球殿堂博物館  
(旧・財団法人 野球体育博物館)  
〒112-0004 東京都文京区後楽1-3-61  
Tel 03 (3811) 3600 Fax 03 (3811) 5369  
<http://www.baseball-museum.or.jp/>



# The Baseball Hall of Fame and Museum

## 公益財団法人 野球殿堂博物館

### リレー随筆(61)

#### 車椅子ソフトボール

競技者表彰委員会委員 松森 茂行 (デイリースポーツ)

2020年東京五輪・パラリンピックに向けてさまざまなスポーツ取材をする中で、車椅子ソフトボールという競技を知った。パラリンピックの実施種目ではない。米国では約40年の歴史があるが、世界的な普及はまだで、日本協会も13年に設立されたばかりだ。

興味深いのはこの競技の日本での歴史が、2人の野球人から始まったことだ。1人は北翔大の大西 昌美准教授。高校野球の名門、北海高監督として春夏6度甲子園に出場し、94年夏はベスト8に導いた名将だ。もう1人はその教え子で北海高出身の元球児、飛鳥 大輔さん。高校を卒業した99年秋に交通事故に遭い、車椅子生活を送っている。

2人は08年に再会した。飛鳥さんはリハビリで出合った車椅子バスケットボールで日本代表候補にもなっていた。その活躍を知った大西准教授が連絡を取った。飛鳥さんは中学時代に全国大会で巨人・杉内 俊哉投手と投げ合った逸材だったが、高校入学後はあまり出場機会に恵まれなかった。大西准教授も飛鳥さんの2年時に監督を退任。そんな経緯もあって師は自然と「また野球をやろう」と声を掛けた。「やりたいです」。飛鳥さんは即答した。

最初は2人だけでキャッチボールをした。もう一度、野球をするという目標に向け、大西准教授は「車椅子に乗りながら行う新しい野球」を創りだそうと考えた。自分のゼミ生も動員して研究を始めた。軟式球を使い、内野ゴロに打ち取った場合、車椅子に乗った打者走者が一塁に駆け込んでアウトになる距離は何メートルが最適なのか。投手の投球はどうあるべきか。試行錯誤を続けた。新しい野球を生み出す作業。飛鳥さんは「最初の3、4年間は大変でした」と振り返る。

「車椅子に乗って野球をする」という師弟の夢に、やがて多くの人たちが関わる。スペイン、ドイツで車椅子バスケットのプロ選手として活躍した堀江 航さんは、米国で競技スポーツとして確立されていた車椅子ソフトボールの存在を伝えた。堀江さんは米大リーグ、レッドソックスの下部組織チームに在籍し08年に車椅子ソフトボールの全米選手権でMVPも受賞していた選手だった。大リーグ各球団がチームを持ち、同じ帽子とユニホームでプレーする競技環境が米国にはあった。

大西准教授らは12年、視察を兼ねて日本代表チームを編成して全米選手権に参加。確立されたルールを参考に車椅子野球からソフトボールへかじを切り、競技化への道が開けた。

夢への賛同者は増えていく。広告代理店勤務で、飛鳥さんの北海高野球部の2年先輩の山田 憲治さんはポスター制作などを依頼されたのをきっかけに、日本車椅子ソフトボール協会の設立に携わり、現在は事務局長を務めている。

協会発足後には西武ライオンズと地元北海道の日本ハムファイターズがスペシャルサポーターに就任した。西武は今年9月に「西武ライオンズカップ」という大会を主催。米大リーグにならい「埼玉A.S.ライオンズ」というチームもつくり、ライオンズと同じ帽子とユニホームを提供した。

西武球団の関 洋二専務取締役は「野球型スポーツへの支援は野球そのものへの振興にもつながる。日本協会の2020年東京大会のパラリンピックの公開競技採用、将来の正式種目化という目標に少しでも力になりたい」と言葉に力を込めた。2人の野球人のキャッチボールから始まった夢に、プロ球団も乗ってうねりは少しずつ大きくなりつつある。

日本での車椅子ソフトボールは、健常者も女性もプレーできる。それでもまだ競技人口は少ない。日本協会加盟チームは北海道、宮城、埼玉、東京、神奈川、北九州の6チーム。さらなる追い風が吹いてほしいところだ。